

平和教材の学習指導

—栗原貞子「生ましめんかな」の授業から—

神 野 正 喜*

(2017年1月15日 受理)

A Study on Learning of the Atomic Bomb Literature

—The Class of a Poem “Umashimenkana” of Sadako KURIHARA—

Masaki JINNO*

A famous poet and peace activist, Sadako KURIHARA wrote a poem “Umashimenkana” at the end of August, 1945. “Umashimenkana” is well known, because this poem expresses the terrible sight of the atomic bombing of Hiroshima City and the hope of living. “Umashimenkana” is the teaching materials of junior high school language arts. The aim of this paper is making a report of reading and understanding of the fifth grade elementary student about “Umashimenkana”.

Keywords: atomic bomb literature 原爆文学, Sadako KURIHARA 栗原貞子, reading of the fifth grade elementary student 小学5年生の<読み>

1. はじめに

広島女学院大学図書館の2階に設けられている「栗原貞子記念平和文庫」には、詩人栗原貞子に関わる資料5000点余が保管されている。それは、2008年7月に寄贈された、直筆原稿、蔵書（自著を含む単行本、雑誌）、書簡、直筆ノート・メモ、写真、新聞等の全資料約5000点と、2014年5月に再び寄贈された未発表詩7編を含む直筆のノートや、論文「核文明から非核文明へ」、戦後GHQの検閲で削除された部分を復活させた完全版の詩歌集「黒い卵」等の19点である^{注1)}。中には、栗原貞子が夫の栗原唯一とともに編集に携わった雑誌「中国文化」全号が含まれている。その創刊号には、代表作「生ましめんかな」の初出である「生ましめん哉—原子爆弾秘話—」が掲載されている。

本稿では、「生ましめんかな」を、小学5年生がどのように読み、そのメッセージをどう受け止めたのかについて、報告する。

2. 栗原貞子平和記念文庫開設の経緯

「栗原貞子平和記念文庫」は、2008年10月7日に開設された。その契機は、長女の栗原真理子氏が、広島女学院大学に資料の寄贈を申し出たことである。

その時の経緯は、当時の広島女学院院長・黒瀬真一郎氏の「『栗原貞子平和記念文庫』開設記念小冊子発刊にあたって」という一文によって知ることができる。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

〈前略〉

ここで、本学への寄贈の申し出を受けるに至った経緯について紹介させていただきます。

昨年早春、「広島に文学館を！市民の会」代表・水島裕雅氏（広島大学名誉教授）と同事務局長の池田正彦氏が来訪され栗原貞子さんの原稿や書籍を長女・真理子さんの意向により広島女学院に寄贈したい旨伝えられました。

〈中略〉申し出は本学にとって大変有り難く名誉なことですが、ヒロシマを代表する女流詩人の諸文献・資料を一私学で所蔵するよりも、広島の貴重な財産として文学館が建設されるまで公の図書館で大切に保管し、広く市民の財産として公開・活用する方が良いのではないのでしょうかと申しました。

五月、再来訪され、真理子さんが小学校時代、女学院への進学を考えておられたこと、本学が学院を挙げて永年にわたり女子教育、平和教育に熱心に取り組んでいること等を真理子さんが寄贈の理由とされました。「平和な社会を創造することを願望した母の思いを受けとめていただけたと思います」真理子さんが寄贈記念式で語られたこの言葉を真摯に受けとめ、広島の歴史を語る上で欠かすことのできない資料として、学内外に発信して生きたいと願っています¹⁾。

ただ、「栗原貞子平和記念文庫」開設に至るまでには、膨大な点数の資料を分類・整理する作業を行う必要があった。その任に当たった一人、天屋楓氏（元栗原貞子記念平和文庫運営委員）の記録によって、開設当時の資料の内容を知ることができる。

段ボール箱一六〇箱分の資料のうち、公開できるものは図書館二階の平和文庫内に展示し、残りは二階と四階の倉庫で保管している。平和文庫内の開架資料は自由に閲覧でき、閉架資料も請求すれば閲覧できる、書籍は一九八〇冊。「生ましめんかな」が掲載された一九四六年発行の栗原貞子氏の初作品集「黒い卵」の初版本など貞子氏の自著や作品掲載本、詩集、反核・平和やアナーキズムに関するもの、交流のあった作家らの寄贈本などがある。雑誌は二三三冊。栗原唯一・貞子夫妻が発行に当たった「中国文化」「リベルテ」全号のほか、総合誌、文学、反核・平和に関するものなど、多種多様である。新聞は三〇七種。栗原夫妻が発行に携わった「広島平民新聞」「広島生活新聞」や深く関わった「平民新聞」など、珍しいものが多い。これを見るだけで、貞子の活動ぶりや交流ぶりが伺えるというものだ。特に戦後間もなく栗原夫妻の手で発行された新聞・雑誌は特に貴重で、これだけの量はこの文庫でしか見ることができない。戦後のヒロシマの反核・平和運動史や原爆文学史を語るうえで外せない資料であるとともに、当時の世情や庶民の生活もうかがわれ、研究対象には〈持って来い〉である。

自筆原稿は二〇四点、自筆創作ノート・日記など一三二点。特に今回の資料整理で発見された創作ノート八冊からは、多くの未発表詩が見つかり、貞子の詩の世界を広げる役割を果たしてくれた。詩のほかにも、今となっては発表したかどうか分からない随筆や評論、講演会用の草稿も多く、貞子の創作活動や平和運動を知るうえで欠かすことのできないものが多い。中には、峠三吉についての評論など興味深い資料もある。段ボール箱八箱分の書簡は、貞子の交流関係だけでなく、当時の平和運動や文学の現状をあぶり出すような内容もあり、極めて興味深い。分析はほぼ手つかずの状態である。

反核・平和・環境団体の機関誌やパンフレット類も多数ある。中でも、原水爆禁止世界大会の資料は、原水爆禁止母の会の創設メンバーとして深く関わった貞子だからこそ入手できるレジュメや内部文書、案文もあり、調べれば分裂開催へ至る内部の詳細な動きなどが分かるかもしれない。ほかに、日教組の勤評闘争に関する資料や占領下のプレスコードの資料など珍しいものもある。このほか、作家の寄贈原稿や段ボール箱三〇箱分にも及ぶスクラップ記事など資料は様々あり、さらに細かい丁寧な整理と分析が望まれる²⁾。

3. 栗原貞子、「生ましめんかな」を語る

栗原貞子の「生ましめんかな」は、一詩人の代表作であるだけでなく、原爆文学の代表作として、そのアンソロジーが編まれたときには、必ず収録される作品である^{注2)}。栗原貞子は、折に触れ、「生ましめんかな」について語っており、それは、詩人が自作を読むという営みにもなっている。

爆心 1.6 km の千田町にある広島貯金局の被爆のただなかの地下室での誕生を書いた私の「生ましめんかな」の詩は、生命と平和の尊さ、人間礼賛のドラマを書いたものとして、集会で朗読されたり、作曲されたり、映画(松山善三監督『百日紅の花』)にもなったり、いくつかの教科書にも採択されている。

そのドラマの舞台となった地下室の被爆ビルは、老朽化して1989年3月解体された。そして被爆ビルのタイルを台石の上に敷いたモニュメントが、白鳥町の中国郵政局の庭にある郵政関係の慰霊碑の横に建立された。碑面には被爆ビルの写真と「生ましめんかな」の全行が刻まれ、同年8月6日に序幕された。序幕の綱を引いたのは地下室で生まれた小島和子さんとその長男の小学校2年生の太士君であった。とりあげた産婆も産んだ母親も、自分の痛みを忘れて気づかった負傷者たちもすでに亡くなり、地下室で生まれた和子さんと産婆の三好ウメノさんの長男の当時中学2年だった惇夫さんが生存しているだけで、時は流れ世代は移った。

私が地下室の誕生を知ったのは近所の農家のおばあさんからだった。その時も今も私は広島市祇園町長束に住んでいるが、爆心から4kmの長束は爆風と爆圧による建物などの被害はあったが、熱線でひどい火傷をしたり死んだりという人はいなかった。しかしこの家でも、軍需工場や官公庁、建物疎開などの動員で出かけ、爆心に近いところで即死したり、火傷や負傷をして帰って来た人が多数あった。

その日無傷で帰ってきた人たちも、1週間たち2週間たつうちに、突然高い熱が出て悪寒や嘔吐におそわれ、下痢や出血斑が現れ、口や鼻や耳から出血し、さいごは洗面器いっぱいほどの血を吐いて苦しんで死んでいった。なかには腸から大量の下血をして死ぬ人もあった。毎日のように死者が運び出され近くの大田川の河原で家族が火をつけて焼くのがあった。

いわば地域全体が死にとりかこまれているような状態のなかで、私は「赤ん坊が生まれた」ということを聞いて深い感動にゆずぶられ、「生ましめんかな」の詩を書いた。

爆心 1.5 km の千田町で被爆した平野美貴子さんは、2歳の美子さんをつれて臨月のお腹を抱え、炎に包まれたわが家を後にして京橋川の土手に逃れた、第一高女が全滅し長女の玲子さんが亡くなったことを1週間後に聞き、その直後に広島貯金局に勤めていた夫が死亡したという知らせを聞いた。

姉の佐藤富士子さんは、広島電話局(爆心 0.5 km)から全身焼けただれて京橋川の土手に辿りついた。8日の夕方、姉妹は美子さんをつれて広島貯金局の地下室へ避難したのだった。産婆の三好ウメノさんは、背中一面と右腕の肘まで焼けただれた重傷者だった。赤ん坊は元気な産声をあげたけれど、地下室では産湯を使わせることもできなかった。

「生ましめんかな」の詩を最初に発表したのは、被爆の翌年の3月、占領軍のプレスコードのもとで創刊した『中国文化』原子爆弾特集号だった。その後この詩は外国の新聞雑誌などでも紹介された。事実がドラマチックな感動を持つものであることは動かぬが、それ以上に事実が象徴的であることに後になって私は気がついた。

暗い地下室で生まれた赤ん坊とは、いったい何なのだろう。それはアジア侵略の15年戦争の暗い時代の末期に原爆が投下され、廃墟の中から生まれたヒロシマそのものであった。血まみれのまま暁を待たずに死んだ産婆さんとは、8月15日の平和の日を待たずに死んでいった20万の被爆者ではないか。20万の被爆者が死ぬことによって、世界の平和を求めてやまないヒロシマが生まれたのだった。

一人の女子中学生は、地下室で生まれた和子さんに思いをよせて書いている。

「いろいろな人が死んで行く中で、命がひとつ生まれたことは不思議でした。そして、そのとき生まれた人が今も生きているということも何だかすてきです。そのときの負傷者や産婆さんの命がかかっている気がして…。み

んな捨身で生ませたのだから、何人もの命を背負って生まれて来たのだから、原爆症にも負けず生きのびたのだと思います。「あのときみんながいなかったら、私は生まれなかつたらう」と今でもそう思いながらこの人は生きているのでしょう。」

そこで、私は次のような手紙を書いて中学生たちに送った。

〈そうです。あのとき地下室で生まれた赤ん坊の和子さんだけでなく、あの15年戦争という暗い時代を生き残った人たちは、みんな戦争や原爆で死んでいったおびたしい死者を背後に負い、死者たちに支えられて生きているのです。そして15年戦争の生存者である親たちから生まれた若い世代も、死者たちと生命を連続させているのです。この生命の厳粛な連続を戦争によって断ちきり、絶滅してはなりません。ひとりひとりの生命の大切さを思い、生命をむざむざ奪う戦争を起こさせないためにも大人もこどもも考え、できることを実践していきましょう。

一度目はあやまちでも

二度目は裏切りだ

死者たちへの誓いを忘れまい。〉

(「軍縮問題資料」1990年12月号より抄録)³⁾

栗原貞子は、「生ましめんかな」の執筆時には気付いていなかったが、「暗い地下室で生まれた赤ん坊」とは、「アジア侵略の15年戦争の暗い時代の末期に原爆が投下され、廃墟の中から生まれたヒロシマそのもの」であり、「血まみれのまま暁を待たずに死んだ産婆さん」とは、「8月15日の平和の日を待たずに死んでいった20万の被爆者」ではないか、と問いかけ、この詩のもつ象徴性に言及している。そして、産婆さんの死と引き替えのようにして、赤ん坊が生を授かったことについて、「20万の被爆者が死ぬことによって、世界の平和を求めてやまないヒロシマが生まれたのだった」と述べている。

この問いかけは、次の一節にも表現されており、最後の一文には、非核への強い思いが表れている。

この詩は被爆の年の八月の末に書きました。当時広島ではどこでも死者がいっぱいで、一時間先には、全然無傷の人でも放射能のため死ぬという不安と死にとりかこまれた状況の中で、新しい生命が生まれたという話をきいて感動して書いた戦後最初の詩です。

暗い地下室で生まれた赤ん坊とは何を意味するのでしょうか。暁を待たず血まみれのまま死んで行った産婆さんとは一体何を意味するのでしょうか。地下室で生まれたのは世界平和の希望であるヒロシマを意味しています。暁を待たず死んで行った産婆さんとは、八月十五日の平和の日を待たずに死んで行った二十万の被爆者を意味しています。二十万の被爆者の死によってヒロシマが生まれたのです。

そうであるならば、私たちはどんなに苦しくてもヒロシマを育てて、核のない平和な世界を創造して行かねばなりません⁴⁾。

4. 「生ましめんかな」の授業—小学5年生—

中学校3年生の国語科教科書(東京書籍)に収録されている「生ましめんかな」を教材にして、小学5年生を対象に詩を読む授業を行う^{注3)}。

児童には、「授業のめあて」として、「『生ましめんかな』にこめられた思いを読み取ろう。」という一文が示されている。栗原貞子さんが、この作品をとおして、読者に伝えたい思い(メッセージ)

- と き ・ 昭和20年 8 月 6 日の原爆投下後のある夜
- ところ ・ こわれたビルディングの地下室＝ローソク一本ない暗い地下室＝地獄の底のような地下室＝くらがりの地獄の底
 - ※ 呼称の変化に着目
 - ・ 暗い地下室＝照明がない、夜である。その上、「ローソク一本ない」「マッチ一本ないくらがり」、つまり、真っ暗である。
 - ※ この暗さは照度の暗さだけでなく、状況や人々の気持ちの暗さや絶望感でもある。
 - ・ 地下室には窓がない。8月だから、暑い夏の夜。
- ようす ・ その地下室を、「原子爆弾の負傷者たち」が「うずめて、いっぱい」
 - ・ 負傷者＝生ぐさい血の匂い、死臭、汗くさい人いきれ うめきごえ
 - ※ 「地獄」という比喻につながる表現。
 - ・ 不思議な声＝「赤ん坊が生まれる」
 - ※ 何が不思議なのか。死にゆく者と生を授かる者。その対照が不思議であり、驚きでもある。
 - ・ しかし、およそ出産にはふさわしくない場所と状況。
 - ・ だからこそ、「人々は自分の痛みを忘れて気づかった。」
 - ・ 「私が産婆です。私が生ませましょう」の「が」に込められた強い意志、使命感。
 - ・ 産婆＝「さっきまでうめいた重傷者」
 - ・ 「かくてくらがりの地獄の底で／新しい生命は生まれた。」
 - ↑
 - 〈対比〉
 - ↓

「かくてあかつきを待たずに産婆は／血まみれのまま死んだ。」

- ・ 生ましめんかな
- 生ましめんかな
- 己が命捨つとも

授業は、児童が自分の考え〈読み〉をワークシートに文章表現し、その交流を通して、読み深めるという手順で進められている。ワークシートにある設問は、次のとおりである。

1. はじめて読んだ感想を、短く書きましょう。
2. 詩に描かれている様子を想像したとき、一番印象に残ることは、どんなことですか。
3. 作者が、一番伝えたかったことが表れているところに、赤えんぴつで線を引きましょう。
また、なぜ、そこに線を引いたのか、その理由を書きましょう。
4. この詩をとおして、作者は、何を伝えたかったのでしょうか。
5. この詩を読んだ感想を書きましょう。

5. 小学5年生は「生ましめんかな」をどう読んだか

前頁の「3」の指示「作者が、一番伝えたかったことが表れているところに、赤えんぴつで線を引きましょう。」に依って、多くの児童が線を引いた箇所は、次のとおりである。

- ・と、「私が産婆です。私が生ませましょう」／と言ったのは／さっきまでうめいていた重傷者だ。
.....18名 (31名中)
- ・かくてくらの地獄の底で／新しい生命は生まれた。19名 (31名中)
- ・かくてあかつきを待たずに産婆は／血まみれのまま死んだ。18名 (31名中)
- ・生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも31名 (31名中)

こうしてみると、児童の反応は、詩の後半に集中していることが分かる。上の「5」の指示「この詩を読んだ感想を書きましょう。」にしたがって児童が書いた感想も、次に示すように、詩の後半に関わってのものが多く見られる。

わたしは、この詩を読んで、改めて、命の大切について知りました。新しい命を、原ばくがおちて、つらい中でも、みんながすくおうとする気持ちや思いがあることが、この詩ではよくわかります。たとえどんなことがあったとしても、なによりが、命なんだなと思いました。

そして、この勉強をして、他の人の考えをきいて、たしかにそうだな、と思うことがたくさんありました。

わたしが、もし、原ばくにあって、まっ暗なところにいて、けがもして、大変で、赤ちゃんをすくおう、自分の命をすてでも、すくってあげようと思えるかなと考えたら、わたしは、たぶん、そんなことはできなかったと思います。でも、そんな中、産婆さんは、自分の命とひきかえにすくいました。とても勇気や思いがある方だったんだなと思います。なので、わたしも、もっと命というものを大切にしていこうと思いました。

また、こんなことがないように、命のことを、みんなが考えれば、戦争もなく、平和でいられると思う。

(K.M 女)

私は、この詩を読んで、人間の生きようとする力ってすごいんだなと思いました。この詩に書いてあるじょうきょうは、血なまぐさく、死臭のする人たちが、地下室いっぱいにおいて、でも、その中で若い女の人の赤ちゃんは、この地獄の底のようなじょうきょうでも生まれてこようとしていて、すごいと思った。そして、自分たちもけがをしているのに、その女の人を気づかうことができ、産婆さんは、自分の命を捨てても、赤ちゃんを、この世にたんじょうさせてあげれたから、いたくても苦しくても、うれしかったんじゃないかなと思いました。

この詩には、いろいろな意味がこめられていると、私は思います。例えば、原子爆弾が落ちてでも、人が希望をあきらめずにがんばっているということなど、他にもたくさんの意味があると思います。

この詩を読んで、私は、いろいろなことを学べたと思うので、読めてよかったです。 (S.M 女)

〇はくは、この詩を読んで、はじめてよんだ時は、やはり原ばくは地ごくだなと思っただけでした。でも、そのあとに、先生たちと考えてみてから読んで、とてもすごいことなんだなと思いました。

はじめに、暑さです。真夏の中、うずめていっぱいの中にいたこと。

次に、生ぐさい血の匂いや、死臭、汗くさい人いきれなどがする中、産まれようとしている、しかも産婆さんは、重しう者なのに、産まれたという事が分かり、とてもおどろきました。

産婆さんは、自分の命とひきかえる思いでやったんだなと思いました。

地ごくのような地下室の中、新しい希望が生まれたのは、すごいと思いました。(S.H 男)

私は、この詩を 読んで原ばくが落ちたとしても、若い女の人にすてきなおり物をして亡くなった人もいたんだなと思いました。もし私がこの若い女の人だったら、助けてくれた方に泣きながら感謝すると思います。赤ちゃんも新しい世界に出て、きっとよろこんでいたと思いました。

こわれたビルディングの地下室にいた人々は、赤ちゃんが生まれたしゅんかんにまた生きる希望をもったのではないかなと思いました。

ローソク一本もなかったけれど、一つの新しい命で地下室はうれしさいっぱいがかがやいていたんだと思いました。(Y.K 女)

6. おわりに

これらの感想を読むと、小学5年生が、栗原貞子の指摘するこの詩の象徴性（「暗い地下室で生まれた赤ん坊」＝「原爆が投下され、廃墟の中から生まれたヒロシマそのもの」、
「血まみれのまま暁を待たずに死んだ産婆さん」＝「8月15日の平和の日を待たずに死んでいった20万の被爆者」、
「20万の被爆者が死ぬことによって、世界の平和を求めてやまないヒロシマが生まれたのだった」）に気づく＜読み＞をもつことは難しい。

しかし、「この詩には、いろいろな意味がこめられていると、私は思います。例えば、原子爆弾が落ちて、人が希望をあきらめずにがんばっているということなど、他にもたくさんの意味があると思います。」(S.M 女)という言葉には、象徴性に気づく可能性を感じることができる。また、他の児童の感想からも、「赤ん坊の生」と「産婆さんの死」を対比させて読み取っていることが分かる箇所や、「原爆」「平和」「極限の状況下での希望」「命」について改めて考えるきっかけになっていると思われる箇所がある。

小学5年生が、これだけの＜読み＞をもつことができるのは、授業の質（教師の力量）だけに起因するのではなく、「生ましめんかな」という作品のもつ力にも拠っている、と考えられる。

<注>

- 1) 「生ましめんかな」の創作ノートは、2016年5月2日に、広島女学院大学から広島市に寄託された。峠三吉の「原爆詩集」の直筆最終草稿、小説「夏の花」執筆のもとになった被爆時の様子を記した原民樹の手帳とともに、広島平和記念資料館に保管される。これらに峠三吉の日記も加えて、2017年度にユネスコの世界記憶遺産への登録を再申請する計画が進められている。
- 2) 数例を挙げると、「生ましめんかな」は、次のようなアンソロジーに収録されている。
 - 大原三八雄・木下順二・堀田善衛（編）『日本原爆詩集』（太平出版社、1970.6.20）
 - 「核戦争の危機を訴える文学者の声明」署名者＝編集世話人（企画編集）『日本の原爆文学⑬詩歌』（ほるぷ出版、1983.8.1）

- 家永三郎・小田切秀雄・黒古一夫（編）『日本の原爆記録①』（日本図書センター，1991.5.25）
 - 日本ペンクラブ（編）／加賀美幸子（選）『読み聞かせる戦争』（光文社，2002.7.25）
 - 原民樹・他（著）『コレクション 戦争と文学19 ヒロシマ・ナガサキ』（集英社，2011.6.10）
- 3）授業者の永松陽子教諭（広島市立亀山小学校）には，授業に関する資料を提供していただいた．ここに記して，感謝申し上げます．

引用文献

- 1）栗原貞子記念平和文庫運営委員会編 2009 『生ましめんかな―〈栗原貞子記念平和文庫〉開設記念―』 学校法人広島女学院 pp. 6-7
- 2）広島文学資料保全の会編 2014 『人類が減びぬ前に―栗原貞子生誕百年記念―』 広島文学資料保全の会 pp. 115-116
- 3）栗原貞子 1992 「生ましめんかな」をめぐって 『Nurse eye』 Vol. 5 No. 12 pp. 8-9
- 4）栗原貞子 1982 「反核詩集」より―反戦とは，平和とは― 『新しい家庭科 We』 No. 8・9 p. 9

参考文献

- 小口 賢 1990.7 『平和教材の研究と実践』 三省堂